

「悲しみの連鎖を止めるために」

福岡県立明善高等学校3年

松岡 怜さん

私は幼い頃から、将来の夢について考えるのが好きだった。初めての夢は、キリンになること。またある時はバレリーナになることだった。おそらく私の持った夢は、合計して軽く三十は超えるだろう。しかしその夢の連鎖は、ある時ぴたりと止んだ。夢がなくなった訳ではない。私の全生涯をかけてでも叶えたいと思うたった一つの夢を、かけがえのない大切な人を失ったあの日、この胸に深く刻み込んだのだ・・・。

2003年十二月六日早朝、私の母は胃がんに犯され他界した。忘れもしない鼻に繋がれたチューブを流れる母の血液。焦点の合わない瞳。痙攣する唇。そして、段々冷たくなっていく、大好きだった白い手・・・。当時まだ小学生だった私には、目の前で何が起きているのかわからなかった。病名すら知らされていなかった。もし母が他界するよりもっと早くからこの病気の危険性を理解していれば、母と過ごす時間をもっと大切にできたかもしれないのに・・・。あの時、悔しさのあまり握った掌の爪痕は、今でもはっきり残っている。

・母の病気が見つかったのは、母が他界する二年前のこと。食べ物や喉にかえるようになり検査をしたところ、胃がんが見つかった。かなり進行していて、三カ月単位で寿命を考えるようにと言われたそう。母は父の勤務する久留米大学病院に緊急入院した。以前は看護師として医療現場に携わっていた母である。発見の遅れたがんが、どれほど危険か十分わかっていたはずだ。それでも母

は、他界するまで一度も人に涙を見せず、弱音も吐かず、髪がなくても睫がなくても、人前ではいつもニコニコ笑っていた。母は哀し過ぎる程に強い人間だったのだ。東京の国立がん医療センターで当時の日本の先端技術を取り入れた手術も受けた。しかし長年に渡って母の体を蝕み続けたがんは、母の体を離れようとはしなかった。母の残した日記と途中まで書かれた遺書から、母の溢れ出んばかりの悲痛な叫びが聞こえてくる。

私は当時の自分の無力さに失望し、それと同時に日本の低レベルな先端医療技術を呪った。確かに日本の先端医療は世界的に高く評価されている。しかし完璧なのか。完璧だとすればなぜ母は死なねばならなかったのだ。なぜ日本のがんによる死亡者が年々増加しているのだ。もちろん医療だけが原因だとは言わない。生活習慣の急速な欧米化や、いわゆるストレス社会も一因として考えられる。ならばなぜ日本の医療がそのスピードに追いついていけないのだ。

嘲笑されるのを承知で言う。日本が世界有数の先端医療技術を有するといふのなら、私はその頂点に立つ。そして私の母を殺したがんを、この世界から消滅させる。がんなんて、副作用なしで完治させてみせる。

・これが私の全生涯をかけてでも成し遂げるべき目標であり、義務であると確信している。それは決して揺らぐことなく私を奮起させる。幼い時に、そこらの子供が味わうことのない経験をし、同じ経験をした人々の中でも一番に無力な自分を恨み、誰よりも惜しみなく全生涯をがんの消滅のために捧げようとあの日誓った私にしか、この夢を叶えることはできない。やってみせる。母のためにも。そして、世界の悲しみの連鎖を止め

るためにも・・・。

個人部門

優秀賞

「将来も耀けるように」

福岡県立明善高等学校定時制2年

田中 千春さん

私は、今、二十九歳になろうとしています。定時制高校に通う二年生です。

十代の時に、全日制高校と、定時制高校を中途退学しました。十代の頃は「高校に行かなくても、結婚すればいい」と考えていましたが、年を重ねるにつれて「勉強したい」と切望するようになりました。

二十一歳を過ぎて、社会に出て、色々な場所で字を書く時、漢字がわからないことで、たくさんの恥をかいてきました。漢字以外にも、基本的な知識が殆どありません。本を読んでも、新聞を読んでもわからないことばかりです。

二年前「このままでは絶対いけない」と思い「本気で勉強したい」と重ねて思いました。そして、明善高校の定時制課程に入学しました。もう何年も勉強から離れていたもので、久々の授業についていけずに、いつも職員室の先生に質問に行きます。

高校生活と並行して、生活の為にバイトもしています。平日は、昼間はバイトをして、夕方から高校に通って……という生活です。病気を抱っている私は、たくさん睡眠をとらないと生活していく上で息切れしてしまいます。「勉強したい」と思って始めた生活ですが、睡眠時間を削ると体調を崩してしまいます。学校帰りのバスの中で、三十分間、授業で

使ったプリントやノートを見て頭に入れようと頑張っています。又、平日の昼間に仕事が休みの日は、市立図書館で、[〽]時間くらい勉強してから、学校に行っています。

不思議なものです。十代の頃は、あまり勉強するのが好きではなかったのに、今は、授業中に先生の話を聞くのが面白く感じている私です。

幼少の頃、私は母に「本をたくさん読む子になるように」と育てられ、毎晩、絵本を読んでもらっていました。小学生になっても、学校の図書館で、本を読んできました。

しかし、十五歳の頃、全日制高校で不登校になってしまいました。毎日、自分の部屋で取りとめのない生活を送っていた私を側で心配していた母は、私に手紙をくれました。その手紙には、「若い頃に、たくさん本を読んでください。」と書いてありました。その手紙には、他にも私を気遣う母のあたたかい言葉が並んでいます。思わず涙で目がにじんだことを覚えています。その手紙は、今でも時々読み返しています。

そうして今、私は、知識を身につけるために高校に通っています。希望を持って、生き生きと生活していけるように。たくさん本を読んで、心の豊かな人間になれるように。今からでも遅くない、と思励んでいます。人間、何でも心から打ち込んで生きると、自信がついて、自然に希望に満ちた生活を送れるのだと思います。今、私は、希望を持って生活しています。今の生活を選んで本当に良かったと思っています。

今、周りの家族や、多くの方々のバックアップのもと、定時制高校で学べることに心から感謝の気持ちと大きな喜びを感じています。皆さんの今迄の支えを

無にしない為にも、きちんと卒業して、私の感謝の気持ちを“かたち”にしたいです。そして、将来、大きな仕事ができるように、今、出来る小さなことを積み重ねて、社会人として、恥ずかしくない私になれるように、と望んで日々を過ごしています。今、希望を持つことができ、輝いているように、そして、将来も輝けるように…と。

個人部門

優秀賞

「私の大志」

鹿児島県立南種子高等学校3年

白元 央さん

私の家は4年前から牛を飼っている。最初は2頭からのスタートだったが、今となつては、親牛1頭、子牛6頭にまで規模が拡大した。父は会社勤めをしており、出勤前と終業後に、牛小屋に行き世話をする。いくら忙しくても、堆肥を取ってバカスを敷き、牛をきれいに金ブラシで磨く。和牛以外にも、いく種類かの農作物を育てているため、母も毎日フル回転で働いている。私も父を手伝い、毎夕、牛の世話をしている。年を経るにしたがつて、農地が広がり、私が畑に行く回数も増えた。そうするうちに、牛が自分になつき、農作物を栽培する楽しさが分かり、次第に私は農業に興味と関心を持つようになった。私は、両親の跡を継ぐことを決心した。

私が就農を決意するに至った理由は他にもある。それは「農業には無駄がない」こと、つまり「地球に優しい」ということを知ったからだ。私の家では、和牛と農作物を作っているの、牛の堆肥

は畑に散布する。すると、土地が肥える。その土地で育った苗は光合成をし、二酸化炭素を酸素に変える。動物は、その恩恵をこうむる。作物がサトウキビの場合、収穫後は工場に出荷され、黒砂糖やキビ酢などに加工される。サトウキビの葉の部分は牛が食べ、サトウキビを覆っているハカマは、焼いて肥料にしたり、牛の寝床に敷いたりする。私は、農業が循環している（＝地球に優しい）ことを間近で実感し、自分自身が農業と共に生きることは、「理にかなった美しい生き方だ」と考えるようになった。

また、私たちの世代は、少子高齢化の時代の中、畑が放棄され廃れていっているのと同様に、畜産農家の減少という現実にも直面している。畜産農家が減少していけば、国産牛も減り、輸入に頼らなければならぬ。しかし、輸入牛においては、偽装やBSE問題などが続発しており、国内では大きな関心事となっている。これに対し、国産牛は自国の基準により育成・加工・管理されており、安全が保障され、安心して食することができる。やはりこうした農業を、私たち「若者の力」で守るべきだと思う。

私の地元である南種子町では、子牛を預けるキャトルセンターを設立し、各畜産農家が子牛を預けた分のスペースに若い牛を充当できるようにしようという大きな事業に取り組み始めた。若い人たちが中心となって、南種子町を、全国屈指の和牛の生産地にしようとする努力しているのだそうだ。私も近い将来、その一員となり、地元の畜産業の発展に携わっていきたい。ただし、私は、自分の子牛をセンターに預けることについては、今はまだ納得できない。限られたセンター内のスペースに、たくさんの子牛が預けられれば、ストレスが溜まったり、病

気になったりするのではないかと不安だからだ。私としては、牛に病気をさせすることは、最も避けたいことである。

私が牛を飼育する上での最終目標は、熊毛地区での共進会で一席を獲得し、県の共進会に出場することだ。共進会とは、月齢ごとの牛の成育状態（体積・資質・品位など）を競う、牛の品評会である。今までも私の父は参加してきたが、一席以内には入るものの、一席を獲得したことがない。この目標は私の夢であり、また父の夢でもある。県の共進会に出場するためにも、肉質の良い牛づくりをモットーに、これから進学する農業大学校で、専門的な知識と多くの経験を積み、自分の納得のいく飼育を模索したい。そして、今まで世話になった両親に、親孝行していきたいと思っている。

個人部門

審査委員特別賞

「働くこと」

熊本県立松橋養護学校1年

横田 萌見さん

私の夢は親元を離れて自立して「働くこと」である。当たり前のように思うかも知れないが、車いすでの生活の私にとっては大きな夢だ。世の中には、働くことを拒む人もいる。ニートやホームレスなど、私から言えば目の前の困難から逃げている人のように思える。しかし、近年では働きたくても働けない人も増えてきている。昨年、派遣社員の契約を突然打ち切る会社が増え、社宅に住んでいた人は、職も家も突然失った。職を失った人が公園に集まり、寒空の下野宿をする様子が、連日のようにテレビで報道

された。このままでは経済は破綻し、年金を収める人も、税金を納める人も確実に減る。国の負債が増える一方である。私が大人になる頃には豊かな国日本が失われる危険性があるのだ。

私は、今、自分が何に向いているのか、どのような職について働けるのかを真剣に考えている。授業の中で、なりたいたいと思っていた職業には資格が必要なこと、その資格をどこで取得できるのかをはじめと具体的に知った。そして「働くこと」の大変さ、大切さを知ることができたのだ。

私は、一昨年まで地元の中学校に通学していた。しかし、翌年四月からは自宅から遠く離れた養護学校に進学した。中学の時は、授業の速さに悩んでいた。ノートをとる時間がなく、質問する勇氣もなかった。しかし高校に入ってから、ほぼ先生と私の二人での授業になった。一対一ということで良い緊張感がある。日々、楽しく学習をしていたが、ふと大進学を希望するにあたって疑問が生まれた。「他校の生徒と比べて、自分の学力は現在どのくらいなのか」ということである。私が希望する仕事は進学することが必須である。そのためには、受験を乗り越える必要がある。しかし、現在は、ライバルの姿がまったく見えない不安もある。

「働くこと」の他にも、一人暮らしをして精神面でも自立したいと考えている。これは並大抵のことではない。田舎暮らしの長い私にとって誰も知らない場所に住むことは冒険とも言える。

この夢を叶えるべく養護学校では寄宿舎に入った。私は、寄宿舎での生活に期待を抱いていたが、それは初日から覆された。寄宿舎では、洗濯、身の回りの整理などを自分でする。まず初日に洗濯

だ。「ん？ 洗剤はどのくらい入れるんだ」「お風呂に必要なものってなんだ」とぞくぞくと疑問が湧いてきた。先輩の姿を見よう見まねで行っていたが、時間がとてもかかった。そんなある日、自宅に電話する機会があり、久しぶりに母の声を聞くと胸がぐつと熱くなった。母が「泣いとらんね」と冗談っぽく言った言葉に反発してみたが、その後の祖母の泣き声に、思わずこらえていたものが溢れた。「こんなことで一人暮らしなどできるのか」と初めて実感した時だった。

寄宿舎生活だけでなく、学校生活にも時間のゆとりがない。なぜないのかと考えると、思い出すのは中学の友達のことだ。私の友達は、当然のように、車いすを押してくれたり、荷物を持ってくれたのだ。しかし、養護学校では、みな同じように自分のことは自分で行う。移動も片付けも準備も、荷物も重いもの以外は車いすにひっかけて運ぶ。なんということだろう。私は中学時代、自分のことは自分で何でも出来ると錯覚していたのだ。これでは、自立からはほど遠い。現在、不況の中「働くこと」の意義を知ることがより必要になってきている。何のために、何を目的に働くのか。私が自立するためには想像以上に難関があるだろう。しかし、不可能ではないと思う。私にも優れた部分があり、それを生かせる職場があるはずである。その場所を探し、しっかりと「働くこと」が大切である。そして、私自身が未来を切り開く存在になってみせる。

グループ部門

最優秀賞

「二十一世紀の食の救世主!？」

「遺伝子組換えで どれんかせやん」

福岡県立久留米高等学校 3年

白倉未貴さん 田中万貴さん

樋口詩歩さん 山口紗矢香さん

山田愛実さん

一、課題研究の動機

最近テレビや新聞で多く食の問題が報道されている。そのため、私たちは食について興味を持つようになった。たまたま、英語の授業で、遺伝子組換えについて取り上げている文章を読んだ。そこには、遺伝子組換えによって新しく開発されたジャガイモで低カロリーのポテトチップを作ることができると紹介されていた。私たちはそれまで、遺伝子組換えについて詳しく知らず、体に悪いものだというイメージを持っていたが、そのような新しい食べ物が存在することに驚いた。

しかし、実際店などに行くと「遺伝子組換えでない」という表示をよく目にする。たとえば、クッキーの袋には原材料トウモロコシという記載の隣に「遺伝子組換えでない」と書かれていた。英語の文章では良いと書かれていた遺伝子組換え食品なのに、このようにわざわざ表示しているということは、遺伝子組換え食品が一般的に認められていないということを意味するのではないだろうか、また遺伝子組換え食品に何か危険が隠れているのではないかと疑問に思い、調べてみた。

二、遺伝子組換え食品とは

遺伝子組換えとは、そもそも、他の植物の細胞の遺伝子を切り取って別の細

胞に組み入れることである。そして遺伝子組換え食品というのは、例えばダイズやトウモロコシなどの作物に、ある細胞の遺伝子の一部を組み入れたものだ。

遺伝子組換え食品は1994年にアメリカで生まれ、日本でも1996年に発表された厚生労働省の安全性の審査にのっとり、輸入や開発が始まった。

私たちは、遺伝子組換えの特徴についてまずインターネットで調べてみた。メリットは①見た目が良い、②農薬を使わずに済む、③栄養価が高いということだ。逆にデメリットは遺伝子組換えを行った作物を食べた人間が、突然変異を起すかもしれないということだ。つまり、遺伝子組換え食品の安全性はまだ証明されていないのだ。ただし、遺伝子組換えによる被害もまだ報告されていない。

三、安全性への不安

ところで、本校生は遺伝子組換え食品とそうでない食品とではどちらを選ぶだろうか。私たちは2年生の4クラスでアンケートをとってみた。その結果、遺伝子組換えではない食品を選ぶ人が45%だった。「どちらでもよい」という答えが46%だったことも併せて考えると、遺伝子組換えについては、消極的、あるいは無関心であるといえる。遺伝子組換え食品を選ばない理由は「安全かどうかはつきり分からない」というものがほとんどだった。このように、遺伝子組換え食品の安全性に不安を持っている人は大変多いのだ。

また、無視できないのが無関心層の厚さだ。この研究を始める前の私たちがそうであったように「遺伝子組換え」についてよく知らないまま、漠然と避けている傾向が見られる。

けれども、「遺伝子組換えの開発をど

う思いますか」という項目には賛成の意見が49%もあった。その主な理由は「これからの開発に期待できると思うから」だった。これは安全性が証明されれば、ためらわずに遺伝子組換え食品を食べるとのことだと思われる。

四、研究の動向

そこで、私たちは遺伝子組換えについて書かれた本が賛成・反対どちらの立場なのか、その傾向を調べてみた。久留米高校の図書館、久留米市立図書館の遺伝子組換えに関する蔵書を対象にして、賛成派と反対派に分けてみた。その結果、1990年代刊行の本¹2冊のうち1冊が賛成で、2000年代刊行の本は12冊のうち6冊が賛成だった。新しい本ほど賛成派の意見が多いということは、遺伝子組換えの開発が進んできて、安全性への信頼が高まっていることを意味しているのではないだろうか。

五、研究の最前線：

九州大学佐藤教授・熊丸准教授の場合もっと詳しく知りたかったので九州大学農学部植物遺伝子資源学の佐藤教授のところへ実地調査に行った。また同大学熊丸准教授にも電話でお話を伺った。九州大学では今、より高い栄養価を持つ米の開発をしている。この稲には次の2つの利点がある。1つ目は、私たちの健康に良い影響を与えることだ。作物の良いところだけを使って組換えを行うので、栄養価が高いものを作ることができる。2つ目は、農家が栽培しやすくなることだ。遺伝子組換えによって肥料を減らし、虫やウイルス、カビに強い作物を作ることが出来る。農家は肥料や農薬を減らせるので、栽培しやすくなる。

長期的にみると安全性はまだ分から

ないところがあるが、安全性評価試験は念入りに行われている。まず文部科学省と農林水産省により、栽培の段階で3回検査し認可され、次に厚生労働省により市場に出してよいかどうか判定される。そして認可されたものだけが市場に出されるのである。

九州大学では、温室の徹底管理の下で米の研究を行っている。きちんと洗浄された空気や水を外に出しているので、研究開発が生態系へ悪影響を及ぼす心配もない。

さらに、最近ゴールデンライスが開発された。これは普通の米よりビタミンAを多く摂取できる新しい品種である。国連食糧農業機関の推定によれば、食事にビタミンAが不足しているために一億2千4百万人の子供たちがビタミンA欠乏症にかかり、毎年なんと25万人が失明しているのだ。このゴールデンライスが普及すれば、失明する子供たちが減るだろう。

今後は遺伝子組換えによって、抗がん剤が含まれた食品や糖尿病を緩和する食品を作ることが期待されている。また花粉症を防ぐ作物も研究されている。つまり、遺伝子組換えには病気を予防する可能性もあるということだ。

六、二十一世紀の救世主！？

さらに、遺伝子組換え技術が将来普及すれば、食糧難で困っている国を救うことができるのではないかと期待されている。地球上の人間の5人のうち1人に相当する12億人を超える人々が、1日1ドル未満で暮らしている。世界的に栄養失調者の数は増加の傾向にある。その数は8億4千万人にも及ぶ。遺伝子組換えはこのような状況を打破することができるのだ。まず第一に、様々な環境に

対応できる食物を作ることができる。たとえば、十分な水が確保できない砂漠でも、遺伝子組換えにより乾燥に強いイネを作れば、栽培ができるようになる。こうして、どんな土地でも食物を作ることができるようになれば、大量生産が可能となり、多くの人々に安い値段で提供できるようになる。また、遺伝子組換え技術で作られた食物は、わずかな量でたくさん栄養が取れるというメリットもある。

実は私たちも、研究を始める前は遺伝子組換え食品に対して否定的な意見を持っていた。安全性に疑問があるので食べたくないと思っていたのだ。しかし、今回の調査で、実際はこんなにも私たちの健康や将来に繋がる秘めたパワーを持っていることに気づいた。長期的な視野で考えると安全性にまだ不安は残るが、農薬を使わずに済む、私たちの健康に良い影響を与えするというメリットを見逃しには出来ない。

食糧難を迎える世界を救う技術として、さらに研究を進めるべきである。漠然とした不安のためにこの画期的な技術を否定すべきではないと思う。遺伝子組換え食品は今後の食糧難を解消する救世主として、これから私たちが生きていく二十一世紀に欠かせないものになるだろう。

グループ部門

優秀賞

「動物が人間の

真のパートナーになるためには」

福岡県立伝習館高等学校1年

大曲優実さん 山本麻衣さん

中尾美貴子さん

近年、ペットブームの影響でいわゆる「ペット」と呼ばれる動物は増加する傾向にある。犬や猫を主とするその種類は多岐に及び、その数は、登録されている犬だけでも46万頭以上に上る（2009年 厚生労働省）。私たち人間にとって、ペットの存在は極めて大きく、飼っている人にとってはもはや無くってはならないものだ。しかしペットについての現状は、決して良いものではない。ペットブームの裏側には、残酷な現実があり、動物たちは今も苦しんでいる。それは何故なのか。どういう経緯で、罪なき動物たちが苦しまなくてはならないのか。また、現状を改善するために、人間には何ができるのか。何をすべきなのか。私たちはペットに関する現状とその改善策について、論じていきたいと思う。

現代人は、一体何を求めて「ペット」を飼うのだろうか。初めに、私たちは人間が動物を飼う理由について考えてみた。太古の昔、人類が最も初めに飼ったとされる動物は犬、そして猫であるとされている。犬は狩猟犬や番犬として、猫は主にネズミ捕りとして飼われていた。犬の嗅覚は非常に鋭く、狩りをする上でとても役に立つし、猫は、住居や穀物を守るために必要だった。すなわち、人間にとって動物とは、大切な仕事をしてくれ、生活を共にする仲間のような存在だったのだ。

しかし、今ではどうだろうか。私たちは、人間と動物との関係は以前と違うも

のに変化しているのではないかと考える。確かに介助犬や警察犬・災害救助犬などは、以前と同じく人間の生活やその仕事を助ける重要な存在である。介助犬が身体障がい者にとって生活の支えとなっていることや、警察犬が犯罪捜査で災害救助犬が災害が起きたときに被災地で活躍していることは、周知の事実である。だが、介助犬や警察犬が人間に飼われている動物の中で占める割合は、登録されている犬の1割はおろか、一分にも満たない（2009年 厚生労働省）。それほどに少ないのだ。普通、一般の人々に飼われている動物は介助犬や警察犬とは違った目的で、つまり「ペット」、愛玩のための動物として飼われているのだ。

テレビや雑誌などではペットに関する番組や記事が多くある。また、都市部へ行けば、ペット用のホテル、レストラン、美容院などが違和感なく、ごく普通に存在している。店には動物用の服やアクセサリーが並んでいる。このように、ペットの暮らしぶり、また、それらの愛され方も人間に近いものになってきている。ペットをわが子のように可愛がる高齢者や、一人暮らしの寂しさをペットの存在によって埋め合わせようとする人々の飼い方が、それを示している。

今まで述べたように、人間と同じように大切に扱われているペットだが、それらに関する現状は、実は正反対であるということ、多くの人々は知らない。

ペットとして飼われている動物の最も大きな死因が「殺処分」だと知っている人間は果たしてどれだけいるのだろうか。そもそも「殺処分」の存在すら知らない人間が多いという、それが現状なのだ。

「殺処分」とは、文字通り動物を「殺」

すことである。日本では一年間で三十万頭近くの犬や猫が殺処分されてきたこともある（平成十九年度）。なぜ、こんなにも多くの動物たちが殺されなければならなかったのか。殺される動物たちの中には、もちろん野良犬、野良猫などもある。しかし、多くはかつて人間に飼われていた犬や猫なのだ。

人間は残酷な生き物である。今まで人間と同じように、わが子のように可愛がっていた動物を簡単に手放し、殺「処分」してしまう。彼らにとって動物はペット、玩具ではないのだ。すべての命は平等である。人間も動物の一員だ、などということが言われているが、途中で見捨ててしまう彼らには当てはまらない。殺処分を行っている動物愛護センターや、保健所に、平気で動物を持ち込む。あるいは道端に、草むらに、ペットを捨てる。そして元ペットの動物たちは皆、殺されてゆく。

殺処分の方法もまた、残酷だ。現在、日本の多くの施設では、炭酸ガス（二酸化炭素）を用いて犬や猫を窒息死させるという方法が主流である。動物たちをまづ「プッシュ」と呼ばれる誘導用の動く壁によつて狭い部屋に押し込め、その空間に高濃度の二酸化炭素を充満させて殺すのだ。

今から三十年ほど前までは、撲殺や毒殺が主流であったという。それに、二酸化炭素には鎮静効果があるので、確かにそれは「安楽死」に近いものかもしれない。しかし、その苦しみを考えてほしい。今まで可愛がられていた自分が、いきなり不気味な部屋に無理矢理連れてこられ、呼吸ができずに息絶えるというその苦しみはどれ程のものだろうか。そんな酷いやり方が、「安楽死」だというのか。ペットブームの陰では、前に述べたよう

な悲劇が、常時繰り返されているのだ。殺処分を減らし、防ぐにはどうすれば良いのか。私たちは福岡県大牟田市の動物管理センターを訪ねた。

大牟田市は昭和四十年には年間4千頭の犬や猫を殺処分しており、日本でも上位を占めていた。そこでは、近年「ワンワン交換会」や「子犬里親さがし」を行っている。これらは、高齢者の飼い主の死亡など、やむをえない理由で飼えなくなった犬や猫を、飼いたい人に譲渡するという活動である。大牟田市はこの活動の結果、犬猫譲渡数が全国で1、2位を争うほどとなった。そして平成20年度には、殺処分数は59頭にまで減少した。この他にも、動物管理センターは市民から、ペットの飼育相談も受け付けている。子犬が十分な躰をされないまま成犬になり、人間や他の動物を咬んで「咬傷犬（こうしようけん）」として、また、手に負えなくなったからといって殺処分されるのを防ぐためだ。ペットの飼育に悩んだときは、ぜひ専門的な知識を持った機関に相談し、殺処分という悲しい結果に終わらないようにしてほしい。

また、殺処分を減らす方法として、犬や猫の避妊・去勢手術がとても有効である。犬や猫は、人間よりも遥かに成長が早く、その結果、子孫が増えるのも早い。特に猫は、数年で数え切れないほどに増えてしまう。施設に連れてこられる動物に占める子犬、子猫の割合は決して低くはない。だから、必要以上に子が生まれるのを防げば、殺処分数は確実に減るはずである。

このように、殺処分をなくすために、様々な活動が行われているが、現在福岡県は、犬や猫の殺処分数が全国一位である。この状態を打開するために、保健所のある、北九州市、福岡市、久留米市、

そして大牟田市を中心に、十年計画で殺処分数を半分にしようという取り組みが策定され、進められている。今、全国でこういった活動は行われており、少しずつ、確実に現状は良くなってきている。これまでも、様々な対策を挙げてきたが、殺処分される動物を減らすために、私たちにもできる身近な取り組みはないだろうか。

まず第一に、安易に動物を飼わないことである。もし飼う場合は、自分が飼う動物の命に最後まで責任を持つべきだ。この、「飼い主が責任を持つ」ということが、動物を飼う上で最も大切なことなのだ。事実、それが十分に出来ていない飼い主たちが、飼っていた動物を捨てることによつて、殺処分が行われている。どうしても引越さなくてはならないなど、避けられない事情がある場合には、次の飼い主を探して動物を譲り渡す、動物を飼える環境を探すといった努力をすべきだ。それが「責任を持つ」ということなのだ。

第二に、「動物はペットショップで買うもの」という固定概念をなくすことだ。私たち日本人は、新しく動物を飼おうとするとき、その入手先としてどんなところを思い浮かべるだろうか。多くの人は、「ペットショップ」だと回答すると考えられる。しかし、動物の入手先として開かれている窓口は、ペットショップだけではない。私たちは、動物の入手先として、動物愛護センターを提案する。そこに収容された犬や猫を引き取って飼えばよいのだ。捨てられた犬や猫に対して、良いイメージを持っていない人間が多いと考えられるが、それは間違った考えであると理解して欲しい。

動物愛護センターは、専門の獣医が健康だと判断した動物しか譲渡しないの

で、病気を持った動物を引き取ってしまうということはない。それに、譲渡される動物には避妊・去勢手術をあらかじめ施す場合がほとんどなので、不幸な命を生む心配がない。また、センターにはチワワやシーズーなど人気のある犬や猫も多数収容されているが、センターは利益を目的とする施設ではないので、多くの場合、引き取りのための費用は無料か、有料の場合でも手数料程度だ。

しかし、ペットショップで動物を購入するとすると、そうはいかない。最近のペットショップでは利益を重視するあまり、餌を十分に与えなかったり、不潔な環境で飼育されたりと、世話が行き届かない状態で売られている動物が少なくない。また、私たちが専門知識を持たないことを利用して、素人では判断のつかない病気や寄生虫を持っている動物に高い値段を付けて売りさばく悪徳業者は後を絶たない。特に人気犬種の中には、無理な繁殖を繰り返すことで弱い子犬や病気の子犬が生まれることが多く、そのような犬が売られていることもある。このような理由で、センターの動物とペットショップの動物とは、条件的に同じか、場合によると、センターの動物の方が良いことさえあるのだ。

センターから動物を引き取ることによつて、殺処分される動物を救うことができるし、殺処分の現状について知り、考えるきっかけにもなる。センターに収容されている動物も、もとは人間に飼われていたのである。ペットショップの動物に劣るところがどこにあるというのだ。

私たちは考える。センターからの動物の引き取りを普及させ、センターの動物に対する偏見を取り去っていく。すると動物を物や道具と同じく、金銭によつて

手に入れるという概念自体が変わる。そうなれば、動物は「ペット」としてではなく、人間にとつてかけがえのない真のパートナーとして、共存していける未来を築けるのではないかと。

すべての命は、愛されるために生まれる。殺されるための命など、この世には存在しないのだ。

グループ部門

審査委員特別賞

「なぜ日本の臓器移植は

広まらないのか」

広島県立祇園北高等学校 3年

米澤聖那さん 福原稚子さん

川口望さん 藤井麻衣子さん

【はじめに】

2009年六月、改定臓器移植法についてA案が可決された。この頃メディアではたくさんの特集が放送されていた。テレビでこの現状を知り、自分たちで少し調べてみることにした。

そもそも今回の改定のきっかけは、WHOの規定改正であった。これは2009年一月「臓器移植は原則として国内で提供されるべし」と発表したのである。この規定改定は、日本の臓器移植において許可されていない十五歳未満の移植の道が閉ざされてしまうということを意味している。これを受けて日本では、AからDの4つの改正案が出された。

現行では、本人（十五歳以上）が臓器移植の意思を生前に書面で表示しており、家族が拒否しない限り、「脳死」を「人の死」とみなしてその臓器を提供できるとしていた。それに対し、B案は年齢制限を十五歳から十二歳に引き下げ

るというもの、C案は、脳死判定基準を厳格化し「脳幹を含む脳全体のすべての機能が不可逆的に喪失すること」としたものの、D案は十五歳未満においては家族の代諾と第三者の確認がある場合のみ「脳死」を「人の死」として臓器提供できるとしたものである。しかしB案からD案は臓器移植が進まない現状を根本から解決するものにはならないという問題があった。

可決されたA案は、書面による本人の意思表示の義務づけをやめ、年齢を問わず、脳死を一律に人の死とし、本人の拒否がない限り家族の同意があれば臓器提供できるようにするものである。この案の利点は、子どもから子どもへの臓器移植が可能になることである。一方で脳死を一律に人の死とすることに根強い抵抗があることなどの問題点が指摘されている。

現在、日本で脳死状態に陥る可能性は全死亡者の1%未満で年間では約3千人から5千人である。日本人は4割以上の人が脳死の下での臓器移植に同意していることが分かっている。しかし実際にドナーカードを持っている割合は3%に満たない。また、欧米では約40日で臓器が準備できるのに対して、日本では400日たっても臓器がなく力尽きてなくなってしまうケースも少なくないようだ。

【日本の臓器移植の歴史】

日本で臓器移植法が初めて成立したのは、1997年六月、施行されたのはその年の十月だった。臓器移植の医療行為としての効果が認められ始めた1960年代から、欧米では問題を抱えながらも法律を整備しルール作りを進めてきた。その一方、日本では臓器移植の施

行までに三十年以上の年月がかかっている。なぜ日本ではこんなにも法律の施行が遅れたのだろうか。

理由の一つとして挙げられているのは、1968年に行われた心臓移植だ。別名和田移植とも言われるこの移植は、法律施行以前に行われた日本初の心臓移植である。しかしこのときのドナーが本当に脳死だったのか、レシピエント（患者）は本当に移植が必要だったのか、などということが後に大きな問題となった。結局この和田移植の真相は解明されないまま移植医療に対する社会不信を招き、長年にわたって日本の移植法施行への歩みを停滞させる一因となった。これ以降、法律施行までの心臓移植は一度も行われていない。

もう一つの原因として、私たち日本人の死に対する考え方が挙げられるだろう。多くの日本人は、昔から死の三徴候（心拍停止・呼吸停止・瞳孔散大）をもって人の死を受け入れ、判断してきたのだ。脳死というのはこの三徴候以前の症状であるから、脳死の患者から主要臓器を摘出するという行為を「人殺しだ」と感じる日本人がいるのは無理のないことかもしれない。そう感じる人々にとつて、臓器移植は決して歓迎されることではない。それらのことが原因となつて、日本の臓器移植の施行が遅れたと考えられている。

しかし、移植法が施行されても日本の臓器移植への歩みは遅いように思われる。施行から10年以上たった今でも、日本は移植に対して保守的だ。そんな日本と移植大国アメリカを心臓移植を例にとつて比較する中で、保守的である理由を考えていこう。

2007年六月現在日本で心臓移植実施施設として認定されている施設は、

国立循環器病センター・大阪大学・東京大学・東北大学・九州大学・埼玉医科大学・東京女子医科大学の7施設のみだ。その上、1997年に「臓器移植に関する法律」が施行されてから心臓移植は45例しか行われていない。これはアメリカの年間の心臓移植実施数二千例以上という数字と比較しても、とても少ない数字だ。

日本とアメリカの根源的な違いは宗教にある。アメリカの宗教界は社会問題について独自の考えを持っているが、脳死状態での臓器移植に反対する宗派はほとんどないという。それどころかドナーカードの所持を信者たちに進める宗派も多くあり、中には「愛する人の臓器を天国まで持って行かないでください」「あなたの臓器がこの世で必要なのを天国では知っています」というステッカーを配布している宗教や教会もあるそうだ。

一方、日本の宗教は脳死を人の死として認めにくい状況にある。事実、今回の移植法改正にあたり、日本宗教連盟は「臓器移植の場合にのみ脳死を人の死として規定すべきだ」として、かつての現行法を支持する姿勢をとっている。その他にも「脳死・臓器移植は生きている他者の重要臓器の摘出を前提としている限り、普遍的な医療行為にはなり難い」と表明していることから、いかに移植に対し前向きでないかがわかる。

現在アメリカは外国人に対して行う移植数を全体の5%に制限している。それは主に医療技術のない国や、保険適用がない国から受け入れるためにある。しかし、数年前に日本人がその枠を独占してひんしゆくを買ったという。イギリス、オーストラリアはすでに日本人の締め出しを始めていて、ドイツでも受け入れ

を断るようになっていく。欧米諸国よりも医療技術が高く保険も大きく日本。そんな日本がわざわざ海外へ行つて手術を受けることは、他国から見てもおかしいことだ。それは法律という高い壁に阻まれていくせいであるが、その壁は法律改正に伴い低くなってきている。この逆風と世界的な臓器不足により各国で強まっている「臓器提供の自給自足」という声に、日本はどう立ち向かっていくのだろうか。

【脳死について】

この臓器移植法改正により、いくつかの問題が生じてくるだろう。

第一に考えられるのは、脳死判定に関する問題だ。今まで人の死とされてきたのは、死の三徴候と言われるものであった。しかし医療技術の発達により、脳の機能が完全に廃絶していても、人工呼吸器により呼吸と循環が保たれた状態が出現することとなった。すなわち、この過程の結果生じる状態が脳死である。脳死は移植の場合のみに限り人の死とされてきた。脳死と判定するための必須条件では、器質的脳障害により深昏睡及び無呼吸の場合、原疾患が確実に診断されている場合、現在行うことのできる全ての適切な治療を用いても回復の可能性が全くないと診断される場合、という前提条件を完全に満たさなければならぬ。また、脳死と判定するための必須項目に關しての確認が必要である。だが法律改正後、臓器移植の場合に限らず「脳死は人の死」とする考え方へと変更された。しかし、子どもは大人より蘇生力に富んでいるため、脳死と診断された後、自発的呼吸の再開により身長が伸び、体重も増え、命を刻み続けている子供たちもいる。脳死から復活した子供たちもい

るので。このようにまだ成長し続けて生きようとしている人たちに対して、死を宣告してよいのだろうか。

提供者側としては、脳死の状態でもまだ生きていると考える。腎不全や肝不全で透析を止めれば死ぬことが確実と見込まれる人、あるいは心不全で全身の状態も悪化し死ぬことが間違いないと見込まれる人についても、息をし、体温がある限りは「死」とは言わない。「死」という言葉は、血液循環も停止し体温が無くなって心臓が止まった時に初めて使うものである。ましてや、自分の親族に脳死判定が出たら、私たちは「脳死Ⅱ人の死」という事実を受け入れ、臓器提供へと踏み切れるだろうか。まだ呼吸をして体温のある人に対して「死」と宣告されるほど苦しいものはない。命の可能性がある人へ「死」の判断をすることは、死が安易に予測され、死亡宣告が安易になされていることのように思われる。だから脳死は改正前のように移植の場合のみ「人の死」とすべきだと考える。

【ドナー不足】

しかし、深刻なドナー不足で臓器の提供を待っている人はおよそ1万2千人おり、それに対し移植を受けられる人は年間およそ200人である。今まではその200人の中で海外渡航移植も行われていたがこれからは、海外渡航移植がしにくくなるだろう、海外においても日本と同じように十分に移植できる臓器があるわけではなく、臓器移植手術の順番待ちをしている。そのような状況に、日本人が入っていくと、その国の人の手術が遅れてしまう。日本には臓器移植のできる進んだ技術があるのだから、日本人は日本ですべきだと非難されているからだ。

さらに臓器のドナー不足の理由として、脳死判定の基準の難しさもあるが、私たちの臓器移植への知識・理解・関心が薄いことが挙げられる。

臓器移植とはどういうものか、という質問をされ、「重い病気や事故により臓器の機能が低下し、移植でしか治療できない人と、死後に臓器を提供してもいいという人を結ぶ医療」と答えることはできるが、どのような臓器が特に不足し、求められているのか、どれだけの人が臓器提供を待機しており、待機している間に、病状や症状が悪化し亡くなっている人がいるのかということとは知らないだろう。

このことは、十月十八日の中国新聞の記事にも表れている。「臓器移植に関する法律の改正に当たってあなたは臓器を提供しますか」という調査で、「はい」と答えた人は改正前と変わらず、「いいえ」より少なかった。臓器移植は第三者すなわち私たちの善意による臓器の提供がなければ成り立たない医療であり、臓器を待っている人々を救うことはできない。脳死判定について厳しくしたり、ゆるくしたりする以前に、臓器がいつ自分や親族に必要となるかわからない。他人事だと思わず、もっと臓器移植や提供などへの関心を向け、より理解を深め、他人の問題ではなく、自分たちの問題としていくべきである。

【今後の課題】

今回の臓器移植法改正に伴い、ドナーカードの所持が重要になってくると考える。臓器移植を円滑に進めるためには、個人の意思表示を明確にする必要があるからだ。その方法の一つとして挙げられるのは、ドナーカード所持の義務化だ。しかし、今のドナーカードには問題があ

り、それは臓器提供拒否の表現の仕方である。今の表現は「私は、臓器を提供しません」となっており、否定的な印象を与える。決して臓器提供を拒否することは悪いことではないし、罪悪感を感じることはない。しかし、今の表現の仕方では提供拒否に同意することがまるで救える命を見捨てることかのように、少なくとも私たちは感じている。この問題の解決策として、マイナスのイメージを持つ言葉ではなく、「臓器を保持する・維持する」など少しでも「拒否」という自分の意思を支持しややすい言葉に変えるという方法がある。臓器移植の選択をするにあたっては、人間の心が深く関わっているので、どんなささいな表記表現にも注意を払うべきだ。

表現方法の他に、まだ自分で判断することができない子供がどのように意思表示するかという問題がある。そこで、私たちが考えたのは、移植についての理解が可能になる年齢を過ぎるまでは、その子供たちの親が代わりに意思表示をするという方法だ。出産の際に渡される母子健康手帳と一緒に、子供専用のドナーカードを手渡し説明することによって、年齢に関わらずより多くの人の意思を明確にすることができる。法律改正によって移植可能な臓器自体の数は以前より増加していることが予想できる。しかしそれと同時に被移植者も増加していくため、ドナー不足は当分の間人々を悩ませるだろう。その他にも移植可能な施をどう増やしていくか、また技術を進歩させていくかなど、問題は山積みだ。日本は法律の整備が遅れたぶん、まだ延びていく可能性は十分ある。一つの失敗を恐れず試行錯誤を繰り返しながら、皆が納得し安心して移植を受けられる未来を作っていくことが大切だ。